

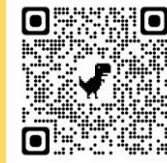
令和8年度病害虫発生予察情報 発生予報第8号(8月)

令和8年8月31日

発表：福島県病害虫防除所

【注意が必要な病害虫】

普通作物	■ 大豆：吸実性カメムシ類 -②
果樹	■ リンゴ：褐斑病 -② ■ リンゴ・ナシ：ハダニ類 -② ■ 果樹共通：カメムシ類 -②
野菜花き	■ 夏秋露地キュウリ：つる枯病 -② ■ キク：アザミウマ類 -② ■ 野菜花き共通：ハスモンヨトウ -③ ■ 野菜花き共通：シロイチモジヨトウ -③ (令和8年8月31日付け防除情報参考)



病害虫防除所
HPは
←こちらから



病害虫に関する
防除対策の
ページは
←こちらから

※ 上記の表に記載された病害虫は、下記の①～③に該当します。

注) ①現状において、注意報レベルの防除を要すると判断された病害虫

②「1 主な病害虫の発生予報」のうち、予察調査の結果、発生時期が「やや早い」、発生量が「やや多い」と予測された病害虫の中で特に懸念される病害虫

③「1 主な病害虫の発生予報」以外で調査の結果、今後、県全域的に発生が多く問題になると判断した病害虫

1 主な病害虫の発生予報

(1) 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
大豆	紫斑病	全域	—	平年並	天候予報（仙台管区气象台8月27日発表）によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想される（±）。	開花後 20～40 日頃に薬剤を1～2回散布する。薬剤散布時期が遅れないように注意する。 防除時期や対策については、令和8年8月4日付け防除対策を参照する。
	べと病	全域	—	平年並	前年の被害粒率は例年よりやや高かった（+）。8月の巡回調査での発生は場割合は例年より低かった（-）。	発生が見られるほ場では、薬剤散布を行う。 防除時期や対策については、令和8年8月4日付け防除対策を参照する。
	吸実性カメムシ類	全域	—	やや多	8月の巡回調査での発生ほ場割合は、平年並であった（±）。天候予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想されている（+）。	発生が見られる場合は子実肥大期（9月上～下旬）までに薬剤散布を実施する。 防除時期や対策については、令和8年8月4日付け防除対策を参照する。
	チョウ目幼虫（ハスモンヨトウ、ツメクサガ）	全域	—	やや少	8月の巡回調査の結果、ハスモンヨトウ（食害面積率）は、例年同様発生は見られず、ツメクサガ（払い落とし頭数）は、例年より少なかった（-）。	幼虫の幼齢が進むと加害量が急激に増加するため、食害が見られたら早急に薬剤散布を実施する。

注) 予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

(2) 果樹

作物名	病虫害名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全 域	—	平年並	8 月中下旬の新梢葉での発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する。
	褐斑病	県 北	—	やや多	県北地方では 8 月中下旬の新梢葉での発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+)。	発生が増加する時期であるため、天候に注意しながら散布間隔があきすぎないようにする。 農作物病虫害防除指針や地域の防除暦に従って防除を実施する。
		県中・県南、会津	—	平年並	県中・県南、会津地方では平年並であった(±)。	
	炭疽病	全 域	—	平年並	8 月中下旬の果実被害での発生は確認されず、発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	降雨が多い場合は 9 月上旬以降も防除を行う。
	キンモンホソガ	全 域	—	平年並	8 月中下旬の新梢葉での発生ほ場割合は、平年より高かったが、いずれのほ場においても少発生であった(±)。	農作物病虫害防除指針や地域の防除暦に従って防除を実施する。
モモ	ハダニ類	会 津	—	やや多	会津地方では 8 月中下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)。	園内の発生状況を確認し、要防除水準(1 葉当たり雌成虫 1 頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
		県 北	—	やや少	県北地方ではやや低かった(—)。	
		県中・県南	—	平年並	県中・県南地方では平年並であった(±)。	
モモ	せん孔細菌病	県 北	—	平年並	8 月上旬の新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや低かった。8 月中下旬の新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	秋期の降雨等により、発生が急激に増加するおそれがあることから、天候に注意しながら秋期防除を必ず実施する(8 月 31 日付令和 8 年度病虫害防除情報(モモせん孔細菌病)参照)。
	モモハモグリガ	県 北	—	平年並	8 月中下旬の新梢葉の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
ナシ	黒星病	全 域	—	平年並	8 月中下旬の果実及び新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	発生が多い場合は、「幸水」収穫後に防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	やや多	8 月中下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+)。	園内の発生状況を確認し、要防除水準(1 葉当たり雌成虫 1 頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
果樹共通	カメムシ類	県中・県南、浜通り	—	やや多	8 月中下旬の果実被害の発生ほ場割合は、県中・県南地方のリンゴ及び浜通り地方のナシにおいて、平年よりやや高かった。	園内をこまめに見回り、成虫の飛来状況をよく確認する。成虫が次々に飛来し被害が懸念される場合には速やかに薬剤防除を実施する。
		県北、会津	—	平年並	県北、会津地方では、平年並であった(±)。	

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(—)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

(3) 野菜、花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏 秋 トマト (被覆栽培)	灰色かび病	全 域	—	やや多	発生ほ場割合は、平年並であったが、一部では発病度の高いほ場が確認されている(±)。また、天候予報(仙台管区気象台8月27日発表)によると、向こう1か月は平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されている(+)	発病葉は摘除し、防除を徹底する。 多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	葉かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	すすかび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	コナジラミ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が見られる場合は、速やかに防除を実施する。
夏 秋 キュウリ (露地栽培)	べと病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全 域	—	やや多	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。また、天候予報によると、向こう1か月は平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されている(+)	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 排水対策の徹底、過湿防止に努める。
	褐斑病	全 域	—	やや多	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。また、天候予報によると、向こう1か月は平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されている(+)	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 被害茎葉残さは、必ずほ場外に持ち出して処分する。 なお、耐病性のない品種を定植しているほ場では、特に注意し、防除を徹底する。
	つる枯病	全 域	—	多	発生ほ場割合は、平年より高く、過去10年間で最も高い割合となった(+)	発病葉や発病枝は摘除し、発生初期から防除を実施する。 ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、すみやかに防除を実施する。

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏 秋 キ ュ ウ リ (露地栽培)	ハダニ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であったが、一部で寄生葉率の高いほ場が確認されている(±)。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。 薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、異なる系統のローテーション散布を実施する。
キク(露地栽培)	白さび病	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であったが、一部で上位葉まで病徴が進展しているほ場が確認されている(±)。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であったが、一部で寄生葉率の高いほ場が確認されている(±)。	高温乾燥条件で急激に、発生量が増えるため、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。 抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	－	多	発生ほ場割合は、平年より高く、寄生株率の高いほ場が確認された(+)。天候予報によると、向こう1か月の平均気温は高いと予想されている(+)。	ほ場をよく観察し、葉裏まで薬剤がかかるように防除を徹底する。
リンドウ	葉枯病	全 域	－	やや多	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+)。	多湿条件で発生が多くなるので、防除を徹底する。
	褐斑病	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	病徴を確認してからの薬剤防除では効果が期待出来ないため、発病を確認したほ場では防除を徹底する。
	黒斑病	全 域	－	やや多	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+)。	降雨が続くと発病しやすくなるので、防除を徹底する。
	ハダニ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	高温乾燥条件で、急激に発生量が増えるため、ほ場をよく観察し、防除を徹底する。
野菜・花き共通	オオタバコガ	全 域	－	やや多	発生ほ場割合は、平年並であったが、被害茎率の高いほ場が見られた(±)。また、天候予報によると、向こう1か月の平均気温は高くなると予想されている(+)。	キクでは生長点付近、ピーマンやトマト等では果実等をよく観察し、寄生や被害が見られた場合は、速やかに防除を行う。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(－)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

2 発生が懸念される病害虫

リンゴ ・モモ・ ナシ等	■ ナシヒメシンクイ ナシヒメシンクイ第4世代成虫の誘殺盛期は、気温が2℃ 高く推移した場合、9月1半旬頃と予測され、第5世代の防除適期は9月3半旬頃と推定されます（農業総合センター果樹研究所（福島市）、8月27日現在）。 本種は主にモモなどの核果類の新梢伸長が停止するとナシ果実への寄生が増加します。例年、ナシでの果実被害が多い地域では、近隣のモモなどにおける防除も徹底しましょう。なお、薬剤による防除を実施する場合には、使用基準を遵守しましょう。 ■ カイガラムシ類 リンゴでの果実調査において、ナシマルカイガラムシによる被害が見られています。ナシマルカイガラムシ第3世代ふ化開始は、今後の気温が2℃高く推移した場合、9月2半旬頃と予想され、ふ化盛期は9月5半旬頃と推定されます（農業総合センター果樹研究所（福島市）、8月27日現在）。 例年、クワコナカイガラムシ第2世代幼虫の防除適期は8月下旬から9月上旬となります。 カイガラムシ類はふ化期の防除が重要であるため、防除適期を逃さないように防除を徹底してください。 ■ 果実吸蛾類 果実が成熟し始めると、果実吸蛾類の成虫が夜間に果樹園に飛来し、果実を吸汁加害することがあります。果実吸蛾類は山林原野に生息しているため、そういった場所に近い園地では注意が必要です。対策として、多目的防災網等の物理的防除、糖蜜（砂糖 200 g、酒 200cc、酢 200cc、水 1400cc を混ぜ合わせたもの）を誘引源とした食餌トラップが有効です。
夏 秋 トマト(被 覆栽培)	■ トマトキバガ 8月中下旬のトマトの調査にて、トマトキバガによる葉の食害が確認されています。葉や果実の被害痕をよく観察し、今後の発生に注意してください。
野菜、花 き共通	■ ハスモンヨトウ フェロモントラップでの誘殺数は、8月1半旬以降から県北地方において誘殺数が増加しています。また、8月中下旬の巡回調査では、露地キュウリ、キクへの食害が確認されています。 平年の誘殺ピークは9～10月に見られることから、今後も発生量が増加し、被害が拡大するおそれがあるため注意が必要です。